果樹の梅雨期に向けた栽培管理について

令和３年５月２４日
農　業　技　術　課

九州地方～東海地方にかけは、既に梅雨入りをするなどし、一時的に曇雨天が続いた。
５月下旬以降は、生育管理や薬剤防除の重要な時期となる。
週間天気予報では晴れ間も見えるものの、天気は周期的に変化するので、気象情報や生育の変化に注意し、次の項を参考に計画的に病害虫防除や栽培管理を徹底してください。

＜施設果樹＞

急激な気温上昇に注意し、高温障害（ブドウの着色不良、オウトウのウルミ果、モモの異常落果やフケ果など）対策のため、換気やかん水等の管理を徹底する。
また、気温が低い場合は、生育遅延の防止や果粒肥大のため、ビニールの開閉や加温により昼夜温の確保に努める。

＜露地果樹＞

＜共　通＞

○降雨により病害の発生が心配されるので、気象の推移に注意し、防除暦を参考に防除間隔が空かないよう、慣行防除を徹底する。
○生育ステージは、昨年に比べ３日～６日進んでいるので、生育に合わせ昨年の散布日より前倒しで実施する。
○曇雨天により低温が続いて生育が遅れる場合は、生育ステージに合わせると散布間隔が空くため、前回の散布からの日数を優先して薬剤散布を行う。
○散布予定日に降雨が予想される場合は、散布を延期せず、降雨前に散布する。
○連続的な降雨や強い雨が降った場合は、薬剤の残効が低下しやすいので、散布間隔を短くする。
○雨の晴れ間に薬剤散布する場合、葉が濡れているときは、ＳＳの送風ファンなどで露を払ってから散布を行う。

＜ブドウ＞

○べと病や灰色かび病、黒とう病などの発生が心配されるので、共通事項に従い防除を徹底する。
べと病の発生が見られる園では、ジャストフィットフロアブル５，０００倍を散布する。

○開花期を迎えている園では、灰色かび病やサビ果防止のため、花カスの除去や薬剤散布を徹底する。

○晩腐病防除のため、第１回ジベレリン処理後に、できるだけ早くロウ引きのカサを掛けるとともに、摘粒が遅れる場合は、先にカサをかける。

防除暦やブドウ晩腐病防除マニュアルを参考に、落花直後と果実の大きさが小豆大頃に、ジマンダイセン水和剤またはペンコゼブ水和剤１，０００倍を散布する。

また、天候不順により防除やカサ掛け、袋掛けなどの作業が遅れる場合は、薬剤による果粒の汚染に注意しながら、セイビアーフロアブル２０の２，０００倍を散布する。

＜モ　モ＞

○せん孔細菌病や黒星病の感染期で、重点防除時期であるため、共通事項やモモせん孔細菌病防除マニュアルに従い防除を徹底する。

○薬剤散布後は、できるだけ間を開けずに袋をかける。

○せん孔細菌病の発生園では、マイコシールド１，５００倍を１週間間隔で２～３回集中的に散布する。なお、収穫前日数と総使用回数には十分注意する。ウメ、オウトウでは残留基準値が極めて小さいため、隣接園では使用しない。

○新梢の病斑や発病果は見つけしだい取り除き、園外に持ち出す。